

国木田独歩

春の鳥



春
の
鳥

一

今より六七年前、わたくし私は或地方に英語と数学の教師を
 為していたことが御座います。その町に城山というのがあ
 って大木暗く繁しげった山で、余り高くはないが甚はなはだ風景
 に富とでいきましたゆえ私は散歩がてら何時いつもこの山に登り
 ました。

頂上には城趾しろあとが残っています。高い石垣いしがきに蔦葛つたかずらから

み附いてそれが真紅しんくに染つていゝ安排あんばいなど得も言われぬ趣おもむきでした。昔は天主閣てんしゅかくの建てたつていた処ところが平地へいぢになつて、何時いつしか姫小松ひめこまつ疎まばらに生ないたち夏草なつぐさ隙間すきまなく茂り、見るからに昔を偲しのばす哀れな様となつています。

私は草を敷しいて身を横よこたえ、数す百年ひやくねん斧おのを入れたことのない鬱うつたる深林しんりんの上を見越みこしに近郊きんこうの田園でんえんを望のぞんで楽しんでたことも幾度いくどであるか解とりませんほどでした。

或日曜かの午後ごごと覺おえています、時は秋あきの末すえで大空おほぞらは水の如ごとく澄すみんでいながら野分のわき吹きすさんで城山じやうざんの林はやしは烈はげしく鳴なっていました。私は例たとの如ごとく頂上ていじやうに登のぼつて、やや西

に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて見ながら、持って来た書籍しよもつを読んでいきますと、突然人の話声が聞えましたから石垣の端に出て下を見下みおろしました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾っているのです。風が烈はげしいので得物えものも多いかして沢山背せなかに負しよつたままなお猶も四辺あたりをあさっている様子です。むつまじげに話しながら楽しげに歌いながら拾っています、それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でしょう。私は暫時見下しばらくしていましたが、又もや書籍しよもつの方に眼を移して何時か小娘のことは忘れて了しまいました。するとキ

ヤツという女の声、驚いて下を見ますと、三人の子供は
 何に懼れたのか枯木を背負たままアタフタと逃げ出して
 忽ち石垣の彼方にその姿を隠して終いました。可怪な
 ことと私はその近処を注意して見下していると、薄暗い
 森の奥から下草を分けながら道もない処を此方へやって
 来る者があります。初は何物とも知れませんでした、
 森を出て石垣の下に現われたところを見ると十一か十二
 歳と思わるる男の児です。紺の筒袖を着て白木綿の兵児
 帯をしめている様子は農家の児でも町家の者でもなさ
 そうでした。

手に太い棒切を持って四囲あたりをきよろきよろ見廻していましたが、フト石垣の上を見上げた時思わず二人は顔を見合しました。子供は熟じっと私の顔を見つめていましたが、やがてニヤリと笑いました。その笑が尋常でないのです。生白なましろい丸顔の、眼のぎよろりとした様子までが唯ただの子供でないとは私は直ぐ見て取りました。

「先生。何を為ているの？」と私を呼びかけましたので私も一寸ちよつと驚きました。が、元来私の当時教師を務めていた町は極く小さな城下ですから、私の方では自分の教おしえ児ごの外の人を余り知しらないでも土地の者は都から来た年若い

先生を大概知っているので、今この子供が私を呼びかけたも実は不思議はなかったのです。其処へ気がつくや私も声を優しゅうして

「書籍ほんを読んでいるのだよ。此処ここへ来ませんか」と言うや、児童こどもはイキなり石垣に手をかけて猿さるのように登りはじめました。高たかさ五間以上もある壁のような石垣ですか。私は驚いて止めようと思っっている中に早くも中程なかほどまで来て、手近かつらの葛かづらに手が届くとすらすらとこれを手繰たぐって忽たちまち私の傍そばに突立ちました。そしてニヤニヤと笑っています。

「名前は何と呼ぶの？」と私は問いました。「六」「六？
六さんというのかね」と問いますと、児童は點頭いた
まま例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまま私の顔を
気味の悪いほど熟視しているのです。

「何歳かね、歳は？」と私が問いますと、怪訝な顔を為
ていますから、今一度問返しました。すると妙な口つき
をして唇を動かしていましたが急に両手を開いて指を
屈て一、二、三と読んで十、十一と飛ばし、顔をあげて
真面目に

「十一だ」という様子は漸と五歳位の児の、ようよう数

を覚えたのと少しも変わらないのです。そこで私も思わず
「能く知っていますね」「母上さんに教ったのだ」「学
校へゆきますか」「往かない」「何故往かないの？」

児童は頭を傾げて向を見えていますから考えているの
だと私は思っています。すると突然児童はワア
ワアと唾のような声を出して駈出しました。「六さん六
さん」と驚いて私が呼止めますと

「烏々」と叫びながら後も振りむかないで天主台を駈
下りて忽ちその姿を隠くしてしまいました。

二

私はその頃やどやづまい下宿屋住づまいでしたが何分不自由で困りますから色色人に頼んで、遂に田口という人の二階二間を借り、衣食いっさい一切のことを任すことにしました。

田口というは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のままに構えて有ゆうふく福ふくに暮くしていましたがこの二階を貸し私を世話してくれたのは少からぬ好意で在あつたのです。ところで驚いたのは田口に移った日の翌日、朝早く起

きて散歩に出ようとすると城山で逢あった児童こどもが庭を掃いていたことです。私は

「六さん、お早う」と声をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑ったまま草箒くさほうきで落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の経たつ中にこの怪しい児童の身の上が次第わがに解わかつて来ました、と言うのは畢竟ひっきよう私が気をつけて見たり聞いたりしたからでしょう。

児童は名を六蔵と呼びまして田口の主人あるじには甥おいに当り、生れついでりの白痴であったのです。母親というは四

十五六、早く夫に分れました。実家さとに帰り、二人の児を連れて兄の世話になっていたのであります。六歳の姉はおしげと呼びその時十七歳、私を見るところではこれもまた白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口あるじの主人も初の程は白痴のことを隠しているようでしたが、何にをいうにも隠し得ることのできないので、終ついに或夜のこと私の室へやに来て教育の話の末に甥めいと姪めいの白痴であることを話しだし、どうにかしてこれに幾分の教育を加えることは出来ないものかと私に相談をしました。

主人あるじの語るところに依よるとこの哀れなきようだいの父
 親というは非常な大酒家で、その為に生命いのちをも縮め、家
 産をも蕩尽とうじんしたのだそうです。そして姉も弟おととも初の中うち
 は小学校に出していたのが、二人とも何一つ学び得ずい
 くら教師が骨を折っても無益むだで、到底他ほかの生徒いっしょと同時いっしょに
 教えることは出来ず、徒いたずらに他の腕白生徒ちやうろうの嘲弄ちやうろうの道
 具になるばかりですから、却かえつて気の毒に思つて退学を
 さしたのだそうです。

なるほど詳しく聞いてみると姉も弟おととも全くの白痴で
 あることが愈々いよいよ明白あきらになりました。

然しかるに主人あるじの口からは言いませんが、主人の妹、則すなわち
きょうだいの母親というも普通から見ると余程抜けてい
る人で、二人の小供の白痴の源因は父の大酒たいしゆにもよるで
しょうが、母の遺伝にも因よることは私は直ぐ看破しまし
た。

白痴教育というが有ることは私も知っていますが、こ
れには特別の知識の必要であることですから私も田口の
主人の相談には浮かと乗りませんでした。ただその容易
でないことを話しただけで止よしました。

けれどもその後ごだんだんおしげと六歳の様子を見る

と、如何いかにも気の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言う能あたわざるもの、聞く能わざる者、見る能わざる者も、尚なお思ふことは出来ません。思ふて感ずることは出来ません。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸きんじゆうに類して居るのです。ともかく、人の形をして居るのですから全く感じがない訳ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が整うていればまだしもですが、更に歪いびつになつて出来て居るのですから、様子が余

程変です、泣くも笑うも喜ぶも かなしむ 悲も みな 皆な普通の人から
見ると調子が狂っているのだから な 猶お哀れです。

おしげはともかく、六蔵の方は こども 児童だけに無邪気なところ
が有りますから、私は一倍哀れに感じ、人の力
で出来ることならばどうかして少しでもその
智能の働きを増してやりたいと思う
ようになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も た 経った後の
と、夜の十時ごろでした、も 最早床に つこ 就うかと思っ
ているところへ、

「先生、お やすみ 寝ですか」と言いながら私の室に入
って来

たのは六歳の母親です。背の低い、瘦形やせがたの、頭の小さい、なかだか凸なの顔、何時いつも齒を染めている昔風の婦人おんな。口を少し開あけて人のよさそうな、たわいのない笑を何時いつもその眼尻めじりと口元に現わしているのがこの人の癖でした。

「そろそろ寝ようかと思っうているところですよ」と私が言う中うち、婦人は火鉢そばの傍そばに坐まって

「先生私は少し願いが有るのですが」と謂いって言い出しにくい様子。「何ですか」「六歳のことで御坐まいます。あのような馬鹿ですから将来ゆくさきのことたも案あじられて、それを思う私は自分の馬鹿を棚たなに上げて、六歳のことが気に

かかってならないので御坐います」

「御ご尤もつともです。けれどもそうお案じなさるほどのことも有りますまい」とツイ私も慰めの文句を言うのは矢張やはり人情でしよう。

三

私はその夜だんだんと母親の言うところを聞きました。が何よりも感じたのは親子の情ということでした。前にも言った通りこの婦人とても余程抜けていることは一見

して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも変わらないのです。

そして母親もまた白痴に近いだけ、私は益々ますますあわれ憐を催うしました。思わず私も貫い泣きをした位でした。

其処そこで私は六歳の教育に骨を折ってみる約束をして気の毒な婦人を帰えし、その夜は遅くまで、いろいろと工夫を凝らししました。さてその翌日からは散歩ごとに六歳を伴うことにして、機に応じて幾分いくぶんかずつ智能の働きを加えることに致しました。

第一に感じたのは六歳に数の觀念が欠けていることで

す。一から十までの数がどうしても読めません。幾度も繰返して教えれば、一、二、三と十まで口で読み上げるだけのことは為しますが、路傍みちばたの石塊いしころを拾みうて二個みつつ並べて、幾個いくつだとききますと考がえてばかりいて返事を為ないので。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をしていいますが後には泣きだしそうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根気よく務めていました。或時は八幡宮の石段を数えて昇のぼり、一ひ、二ふ、三みと進んで七ななつと止り、七だよと言い聞して、さて今の石段は幾個いくつだとききますと、大きな声で十と答える始末です。松の並木

を数えても、菓子を褒美ほうびにその数を教えても、結果は同じことです。一ひ、二ふ、三みという言葉と、その言葉が示す数の観念とは、この児童こどもの頭に何の関係をも有もっていないのです。

白痴すうに数の観念の欠けていることは聞てはいました。が、これほどまでとは思いません。私も或時は泣きたい程に思い、児童こどもの顔を見つめたまま涙が自然ひとりに落ちたこともありました。

然しかるに六歳はなかなかの腕白者で、悪戯いたづらを為するときは随分人を驚おどろかすことがあるのです。山登りが上手で城

山を駈廻かけまわるなどまるで平地を歩くように、道のあるところ無ところい処、サツサと飛ぶのです。ですから従来これまでも田口の者が六蔵は何処へ行つたかと心配していると昼飯ひるめしを食つたまま出て日の暮方になつて城山の崖がけから田口の奥庭にひよつくり飛び下りて歸つて来るのだそうです。木拾いの娘が六蔵の姿を見て逃げ出したのは必定きつとこれまで幾度となくこの白痴の腕白者に嚇おどされたものと私も思い當つたのであります。

けれども又た六蔵は直きに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて折り折り痛ひどく叱しかることがあり、手の平で打つこ

ともあります、その時は頭をかかえ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑っている様は打たれたことを全然すっきり忘れて終しまったらしく、これを見て私は猶更なおよさらこの白痴の痛いたましいことを感じました。

かかる有様ですから六蔵が歌など知っている筈はずも無さそうですが知っています。木拾いの歌うような俗歌を暗んじて、おりおり低い声でやっています。

或日私は一人で城山に登りました、六蔵を伴れてと思いましたが姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖国ゆえ天気さえ佳ければ極く暖か

で、空気は澄んでいるし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天主台の下までゆくと、寂々として満山声なき中に、何者か優しい声で歌うのが聞えます、見ると天主台の石垣の角に六蔵が馬乗に跨がって、両足をふらふら動かしながら、眼を遠く放って俗歌を歌っているのです。

空の色、日の光、古い城趾、そして少年、まるで画です。少年は天使です。この時私の眼には六蔵が白痴とはどうしても見えませんでした。白痴と天使、何という哀

れな対照でしょう。しかし私はこの時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。

今一ツ六蔵の妙な癖をいいますと、この児童こどもは鳥が好で、鳥さえ見れば眼の色を変て騒ぐことです。けれども何を見ても鳥からすといい、いくら名を教えても憶おぼえません。

「もず」を見ても「ひよどり」を見ても鳥といっています。可笑おかしいのは或時白鷺しらさぎを見て鳥といつたことで、鷺を鳥にいい黒くろめるといふ俗諺ぞくげんがこの児こどもだけには普あたりまえ通なのです。

高い木の頂辺てっぺんで百舌鳥もずが鳴いているのを見ると六蔵は口をあめぐり開けて熟じっと眺ながめています。そして百舌鳥の

飛立ってゆく後を茫然ぼうぜんと見送る様は、頗すこぶる妙で、この
児童には空を自由に飛ぶ鳥が余程不思議らしく思われま
した。

四

さて私もこの憐あわれな児の為めには随分骨を折ってみま
したが眼に見えるほどの効能は少しも有りませんでした。
た。

かれこれするうちに翌年の春になり、六歳の身の上に

不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六歳の姿が見えませんが、昼過になつても帰りません、遂に日暮になつても帰つて来ませんから田口の家では非常に心配し、殊ことに母親は居ても起たつてもいられん様子です。

其処そこで私は先ず城山を探さがすが可よからうと、田口の僕しもべを一人連れて、提灯ちようちんの用意をして、心に怪い痛いたましい想おもいを懐いだきながら平常いつもの慣れた径こみちを登のぼつて城趾しろあとに達いたしました。

俗に虫が知らすというような心持で天主台の下に来て

「六さん！　六さん！」と呼びました。そして私と僕と、申し合わしたように耳を聳そげだてました。場所が城趾であるだけ、又た索さがす人が普通なみの児童こどもでないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主台の上に出て、石垣いしがきの端から下をのぞいて行く中うちに北の最も高い角の真下に六蔵の死骸しがいが墜おちているのを発見しました。

怪談でも話すようですが実際私は六蔵の帰りの余り遅いと知ってからは、どうもこの高い石垣の上から六蔵の墜落して死だように感じたのであります。

余り空想だと笑われるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のように空を翔かけ廻る積りで石垣の角から身を躍おどらしたものと、私には思われるのです。木の枝に来て、六蔵の眼のまえで、枝から枝へと自在に飛でみせたら、六蔵は必定きつと、自分もその枝に飛びつこうとしたに相違ありません。

死骸なきがらを葬なつた翌々日、私は独ひとり天主台に登りました。そして六蔵のことを思うと、いろいろと人生不思議の思たに堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死、などという問題が年若い私の

心に深い深いかなしみ哀かなしみを起しました。

英国イギリスの有名な詩人の詩に『童わらべなりけり』というがあります。それは一人の児童こどもが夕毎ゆうべごとに淋さびしい湖水ほとりの畔ほとりに立て、両手の指を組み合わして、梟ふくろの啼なくまねをすると、湖水むこうの向やまの山ふくろの梟ふくろがこれに返事をする、これをその童わらべは楽たのしみにしていましてが遂ついに死にまして、静かな墓たまに葬られ、その霊たまは自然ふところの懐ふところに返ったという意こころを詠じたものであります。

私はこの詩が嗜すきで常に読んでいましてが、六歳の死を見て、その生涯を思うて、その白痴を思う時は、この

詩よりも六蔵のことは更に意味あるように私は感じました。

石垣の上に立って見ていると、春の鳥は自在に飛んでいます。その一ひとつは六蔵ではありませんか。よし六蔵でないにせよ、六蔵はその鳥とどれだけ異ちがっていましたろう。

憐あわれな母親はその児の死を却かえつて、児のために幸福しやわせだといいながらも泣ていました。

或日のことでした、私は六蔵の新しい墓まいにお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に来

ていて頻しきりと墓むの周まわ囲りをぐるぐる廻まわりながら、何か独ひとりの語ことを言いっている様子ようすです。私の近ちかづくのを少すくも知しらないと見みえて

「何なにだっつてお前まへは鳥とりの真ま似ねなんぞ為なした、え、何なにだっつて石いし垣かきから飛とんだの？……だっつて先生せんせいがそう言いったよ、六むさんは空そらを飛とぶ積たかりりで天主台てんしゅうだいの上うへから飛とんだのだっつて。いいくら白痴ばかでも鳥とりの真ま似ねをする人ひとがいますかかね」と言いっつて少すくし考かんえて「けれれどもね、お前まへは死しんだほうほうが可よいよ。死しんだほうほうが幸しやわ福わせだよ……」

私わたしに気きがつくや、

「ね、先生。六は死んだほうが幸福しやわせで御座いますよ」と
言つて涙をハラハラとこぼしました。

「そういう事も有りませんが、何しろ不慮の災難だから
あきらめるより致方いたしかたがありませんよ。……」

「けれど何故なぜ鳥の真似なんぞ為たので御座いましょう」
「それは私の想像ですよ。六さんが必定きつと鳥の真似を為て
死んだのだから解るものじゃありません」

「だって先生はそう言ったじゃ有りませぬか」と母親は
眼をすえて私の顔を見つめました。

「六さんは大變鳥が嗜すきであつたから、そうかも知れない

と私が思っただけですよ」

「ハイ、六は鳥が嗜好すきでしたよ。鳥を見ると自分の両手をこう広げて、こうして」と母親は鳥の搏翼はばたきの真似をして「こうして其処そこらを飛び歩きましたよ。ハイ、そうして鳥からすの啼真似なくが上手でした」と眼の色を変えて話す様子を見ていて私は思わず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼はねをゆるやかに、二声三声鳴きながら飛んで、浜の方へゆくや、白痴の親は急に話を止やめて、茫然ぼうぜんと我をも忘れて見送っていました。

この一羽の鳥を六蔵の母親が何と見たでしょう。

日本文学電子図書館

牛肉と馬鈴薯・酒中日記

著 者：国木田独歩

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館